

信越 ビジネス最前線

システムスクエア（新潟県長岡市）が人工知能（AI）を搭載した異物検査装置の製造・販売に力を入れている。これまで見逃しやすかった魚の小骨などの自動検出率を大幅に改善した。1989年の創業から30年、独自製品を開発し、一歩ずつ同装置業界で地歩を固めてきた。構想から15年かけた新本社工場も稼働し、さらなる成長を目指す。

AI 異物検査装置に注力

システムスクエア

（長岡市）



展示会のブースを訪れた来場者に製品の特徴を説明する（東京・有明）

明）は熱気に満ちていた。システムスクエアのブースには山田清貴社長の姿があった。次々と訪れる食品メーカーの関係者の中には、同社が欧州と並んで販売拡大を目指す中国などアジアの企業も少なくない。従業員がAIを搭載した異物検査装置などの性能について熱心に説明する。たとえば、小骨を抜いた魚の切り身を製造する食品メーカー向けのエックス線検査装置。AIが深層学習（ディープラーニング）することで、魚の身に残った小骨をモニターにわかりやすく表示し、検査員が取り除く時

新工場で生産効率向上

が困っている点に耳を傾け、一つずつニーズを形にしていきたい。AIによって数年後には、市場の姿が大きく変わっていく可能性がある。約15億円を投じ、5月に稼働させた新本社工場はこれからの成長の鍵を握る存在でもある。倉庫を含め長岡市内4カ所に分散していた開発・生産拠点を集約したことで、生産効率が大幅に向上した。各部門のスタッフが必要に応じてすぐに集まり、意見交換できるようにになった点は大きい。さらに、取引先からの信頼獲得にも大きく影響するという。「うちの取引を検討する企業の中には『器』を見て判断するケースもあるからだ」（山田社長）

35歳で起業し、多くの失敗経験を持つ山田社長の思いを象徴する言葉がある。「百見は一体験にしかず」。知識も大切だが、体験はそれを上回るという意味で、起業を目指す若者へのメッセージでもある。（磯貝守也）